

## 母が守るもの

野瀬 隆平

コロナに対して世界で最も安全または危険な国はどこかという調査がある。アメリカの総合情報サービス会社、ブルムバーグが毎月行っているものだ。

この感染症による社会・経済への影響を小さく抑えつつ、いかに効果的に対策をとっているかを国別に評価するものである。**The Covid Resilience Ranking** と称している。レジリエンスというのは、日本語に訳せば「耐性」ということか。

世界の 53 か国を対象に、感染者数、死亡率、陽性率やワクチンの契約状況など 10 の指標について点数をつけ、その総合点で評価する。

昨年 11 月の時点では、1 位のニュージーランドに次いで、日本は 2 位にそして 3 位は台湾であったのが、今年 1 月の最新の調査では、日本は 8 位に後退し、1 位のニュージーランドは変わらず、2 位シンガポール、3 位オーストラリア、4 位台湾となった。ちなみに、最悪の 3 か国は、コロンビア、南アフリカそれに最下位メキシコである。

注目したいのは、安全な国の多くが、島国でかつ国のトップが女性であることだ。島国が上位に来るのは解る。

では、女性がリーダーであるのは、たまたまなのか。強いていうならば、女性は物事を観念的にではなく現実即して感覚的に捉えるからなのか。あるいは、命を生み育てるという母性から、先ずは人が健康に生き延びてゆくことを、無意識のうちに最優先で考えるからだろうか。

残念ながら感染地帯のど真ん中にあるドイツは 36 位だが、テレビで見た女性首相のあの語り口は、正に国民の心に訴えかける母親の声のように思えた。

ここで思い出したのは、受験勉強をしていた頃のことである。夜遅くまで机に向かっていると母が覗きにきて、もう寝なさいという。それでは、明日は早く起きて勉強するから、7 時には絶対起こしてと念を押す。

しかし、翌朝目が覚めたときは、もう 9 時に近かった。あれだけ頼んでおいたのになじると、母は穏やかな表情のまま、ただ一言、「ごめん」と云っただけだった。